

# 本の魂を紡ぐ職人

手製本家 門川智子が語る伝統と技術

デジタル時代において紙の本は単なる情報媒体を超え、芸術作品としての価値を持ち始めています。本インタビューでは、手製本家として活躍する門川智子さんに、伝統的な製本技術や本の修復、そして本を大切にする文化について語っていただきました。その繊細な技術と深い知識は、私たちに本の持つ物理的な美しさと耐久性、そして文化的価値を再認識させてくれます。

インタビュー〓野上千夏

写真提供〓門川智子

構成〓笹尾優子

## 糸と革で本を「生かす」 ルリユールの構造と美

——仕事について教えてください。

門川 フランス伝統の手製本技術ルリユールを学び、池袋の工房で13年間、製本教室の講師をしながら注文製本や図書館などで古書の修復や保存処置も行っています。

——ルリユールについて簡単に教えてください。

門川 ルリユールはヨーロッパで伝統的に作られてきた、背のしつかりとした上製本（ハードカバー）です。すべて手作業で行うことが特徴です。本文の折りから綴じ、背の成形、表紙貼り、金箔押しまで全工程を手作業で行います。背には支持帯をまたいで糸でかがり、麻ひもを表紙ボードに通して本文

と表紙を一体化させる古典的な構造です。背の丸みはハンマーで整えます。

——道具や素材はどんなのですか。

門川 かがり台、錐、先の丸い革用針などを用います。穴位置は束ねて正確に

開けます。表紙は革や布、見返しや小口装飾にマール紙も使います。背タイトルは活字で金箔押しを専門家に依頼することもあります。ルリユールは中身と表紙が麻紐で物理的に繋がれるため、非常に高い強度を持つ製本技法で



あり、「本」というものを大切に扱う文化を支えてきました

—— 作例を教えてください。

門川 サン＝テグジュペリ『戦う操縦士』を牛革で装幀したものです。紺・青緑・茶・水色の革を同じ高さで貼り合わせるモザイク技法を採用し、見返しは作品の余韻を意識した控えめなマープルにしました。ノドには補強革を配し、開閉の耐久性を高めています。



もう一度、頁に息を

## 古書修復と保存の実務

—— 現代の上製本との違いを教えてください。

門川 現代は本文と表紙を別に作って後で合体しますが伝統的手製本は支持帯を介して直接結合します。手間はかかりますが、堅牢で長期保存に適します。

—— 修復で気をつけていることはありますか？

門川 破れ、綴じ外れ、セロハンテープの劣化除去などを中性材料と和紙で処置します。欠損した表紙角は芯紙で形を復元し、近似素材と着色でなじませます。保護のため中性紙の保存箱やスリップケースも一冊ごとに詠えます。長く使われてボロボロになった聖書や

アルバムなどの修復依頼を受ける際、長く使っていて、これからも愛用したいという気持ちに答えたいと思って修復に取り組んでいます。

## 工房と図書館で学んだ歲月

—— 教育活動について教えてください。

門川 入門講座では一年で基礎を学び、ノートやアルバム、上製本へと進みます。文庫のハードカバー化、御朱印帳やスクラップブック等のワークショップも行い、初学者でも準備済み材料で美しく仕上げられます。

—— この道に入った経緯を教えてください。

門川 大学卒業期にテレビで工房を知り、「手でやる仕事」を直感して門を叩きました。国会図書館で働きつつ週1

で入門、定員待ちを経て2年間の専門プログラムへ。以後、工房講師のほか、一橋大学貴重書修復工房や都立中央図書館で保存処置に従事し、1700年から1800年代の西洋古書にも関わりました。

——続けられた、モチベーションはなんでしょうか？

門川 手で作る行為そのものの喜びと、機会に恵まれたことです。声をかけてくださる人や現場との出会いが背中を押してくれました。

——失敗から学んだことは何ですか？

門川 作業を慎重に進める重要性ですね。修業時代に後戻り出来ない痛みを知り身に刻み、慎重な工程管理を徹底するようになりました。

## 残すために作るアルバム 保存とこれから

——今後の展望を教えてください。

門川 工房講師は9月で一区切りします。これからは「残すための仕事」に重心を置き、写真アルバムのベタつき台紙からの移し替えなど、長期保存に適した提案したいです。出会いの中で必要とされる技術を活かし、道筋をひらいていきます。

——学生へのメッセージお願いします。

門川 人の寿命は百年ほどですが、本は何百年も生きられます。ものとしての良さと構造を知り、作る・直す・守るという営みごと愛してくれる仲間が増えたら嬉しいです。

## 門川智子（かどかわ ともこ）

2005年 ルリユール工房エコール・プログラム修了 渡仏、Atelier d'Arts Appliqués du Vésinet にてルリユールを学ぶ2010年よりルリユール工房講師 2010年ー2018年 一橋大学社会科学部古典資料センター貴重書修復工房勤務 2017年より東京都立中央図書館資料保全室にて書籍修復 各地で製本ワークショップを行うほか、自宅にてルリユール制作、書籍修復の工房を主宰。



© Yuya Hoshino



# 占いは、俯瞰に変える技術

占い師 まさこ



## 占い師 まさこ

1969 年大阪生まれ 夫の自営業の経理をしながら 50 歳を期に起業の世界に飛び込む。「占いは、視点を変える技術」として今日も悩める人の心に寄り添っている。

## 喧嘩を終わらせた魔法の言葉

私が、占い師という道を選んだのは、計画された転身でありませんでした。人生の迷路のなかで、どうにもならない現実につつかり、見えない糸をたぐり寄せるようにたどり着いたのが私にとって占い師という仕事でした。

きっかけは、再婚した夫との関係の行き詰まり。すれ違いと疲弊のなかで自分の生き方を根本から見つめ直す必要に迫られました。そんなとき一冊の本に出会いました。そこにはまず自分自身を愛する大切さが書かれており「どうせ私は愛されてるし、と毎日唱えてみて」と書いてありました。半信半疑でした。でもどうにか夫婦関係を良くしたくて続けていたある日、いつもの夫婦喧嘩の最中、思わず信じられない言葉が自分からこぼれ出しました。「どうせ私のことを愛してるくせに!」自分でも驚きました。私、何を言っているんだろうって、そしたら次の瞬間、夫が想定外の返答をしたんです。「その通りじゃ、ボケ!」一体、何が起こったか訳が分かりませんでした。二人の間の張りつめた空気がふっと緩んだ。これが私の中で言葉の力を感じた、最初の瞬間でした。

## 50歳、予期せぬ占い師の道へ

やがて言葉の力を追及しようとした私は、カウンセラーを志すことに。人生を変えるきっかけとなった「どうせ愛されてるし」の著者の弟子の起業塾に通うことにしました。個人事業主の夫が背負うものの、彼の孤独を少しでも理解したかったんです。けれど、カウンセラーの資格取得にかかる長い道のりにためらいを感じてなかなか踏み出せずにいました。そんなとき、起業塾の初回でとんでもない宿題が出されました。「来月の授業までに、なにかイベントを開催すること」。すべての準備が揃ってから起業してイベントをしようと思っていたので、なにも手段がないので非常に悩みました。この話をカフェ経営している友人に話すと「うちでタロットカードを使って占いをしてみたら？」と提案が。その場でインターネットを開いて、タロットと解説書を買いました。迷いや戸惑う暇はありませんでした。「とにかく来月までに宿題のイベントを開催せねばっ！」と、必死でした。未経験から1か月占いの勉強をしてイベントを開催しました。その小さな挑戦が、占い師としての第一歩になりました。実というとは私は現

実主義で、占いを信じておらずタロット鑑定も受けたこともありませんでした。しかし占いを通してクライアントの世界観や悩みを肯定することは、私の求めていた言葉の力、カウンセリングそのものでした。タロットをすることによって相手と悩みに寄り添う術を見出せたんです。

## 不妊治療が教えてくれた「戦わないこと」と「あきらめる力」

私の人生の核は、30代のころ、最初の結婚時代に経験した不妊治療にあります。周囲の期待、家族の視線、自身の年齢への焦りがあり、つらい思い出です。なかでも私を最も傷つけたのは、義理の両親からの厳しい言葉でした。「お前のせいだ」「こんなサメ肌、子供にうつってしまう」。悪意の言葉は、私の心に深く突き刺さりました。今なら分かるけれど、義理の両親は、幼い頃に戦争を経験したせいで、息子を他人に奪われるという怖れと他責的な傾向がありました。気の毒には思いますが、冷たく当たられるのは、とてもつらかった。また、この戦いがある毎日こそが不妊の原因だったと思います。なぜなら、子供を育むことと戦うこと

は、全く別のエネルギーだから。今でこそ言えるけれど、当時の私は、戦うことをやめる勇氣はありませんでした。

私は意地になって自費で不妊治療に通い続けました。注射の痛み、結果を待つ時間。やがて私は1つの思いにたどり着きました。34歳まで妊娠しなかったら婚活を辞めて、離婚しよう。自分の夢に期待することや、そのために努力することは素晴らしいけれど、同時に絶対になうという思いは、傲慢でもある。「こうあるべき」「こうになりたい」と結果を握りしめるほど、人生は苦しくなる。思い通りにいかない現実を受け入れたとき、少しずつ心がほぐれていく感覚を感じた。私にとって「あきらめる」とは、自分を許す力のこと。つまり自分の限界を



否定的にとらえるのではなく、より良い可能性に飛び込む勇気を持つことです。

治療の終盤、私は一人の医師に出会いました。それまで担当の医師は無表情で事務的でしたが、その「ひげもじゃの先生」は、温かい声で患者によりそって話してくれる優しい方でした。後に先生自身が病で子どもを授けられない立場だったと聞きました。だからこそ、妊娠を諦めない姿勢で人一倍、患者さんの心に寄り添ってくれたのでしょうか。ある日、受精卵の状態が思わしくなく、私が「もう治療は、やめようかな」と漏らしたとき先生は静かに「もう一度だけ挑戦しましょう」。その一言に張りつめていた心がゆっくりほぐれていきました。寄り添ってくれた言葉に今まで一人で頑張りすぎていた私自身を初めて「もう大丈夫だよ」と、許せた瞬間です。最後の結果は成功しませんでした。が妊娠と結婚をすっぱりと終えることが出来ました。

義実家からの不遇な対応と不妊治療という過酷な経験のなかで、私は2つ学びを得ました。それは、どんな自分でも許すこと、自分にできないことを優しいまなざしで見つめ、ときに夢を手放す覚悟を決めること。「あきらめる力」

と「戦わない姿勢」を身につけました。これは逃げではなく、しなやかに生き抜くための知恵です。のちに、この考え方や教訓は、再婚した現在の夫との関係を築き直すとき、占い師として人と向き合うときに、私の人生を静かに支える羅針盤となっていました。

## 野良猫な夫が愛され夫になるまで



不妊治療の経験で学んだ「あきらめる力」は、再婚後の夫婦関係を立て直す羅針盤になりました。この夫は、前妻との離婚後に二人の娘を育ててきたシングルファーザー。当初、夫は心

を天岩戸のように閉ざし、裏切られた経験から人を試す、まるで野良猫のようでした。しかし、意地悪なのではなく、本当は人を信じたいけれど信じきれない痛みがある。夫の行動の裏には、「寂しさがある」と気づきました。なので、戦って責めるのではなく、理解して歩み寄ることを選びました。

関係をよくしたい一心で、私は男性心理について書かれたブログを読み漁りました。そこにあったのは、男性が最も求めることは、役に立っているという実感。この達成感を満たすために「ありがとう」「かっこいいね」「あなたのおかげです」と伝える。最初こそ照れくさかったですが、毎日その三つの言葉を意識して夫に伝えるようにしました。すると変化は少しずつ訪れました。いつも無口で仏頂面だった表情が、日に日にやわらいでいきました。「ありがとう」を言えば、照れながらもどこか誇らしげに笑う。スーツを着た日は、「かっこいいね」をもらうまでわざと玄関で待っている。「あなたのおかげ」と伝えようと、どこか安心した顔を見せ始めました。分かりやすい変化に「こんな簡単なことで良かったんや。あの夫婦喧嘩の数は一体なんやったんだろう」って笑えました。





この3つの言葉はテクニクや男女の駆け引きではなく、彼の心に刻まれた不信をほどく、いたわりでした。実際は夫を信じて接する私に変化が生まれたのだと思います。続けていると最初こそ、かつこいいと言うと、お世辞だと思えない不機嫌になっていたのに、最近はドラマを観ると「横浜流星と俺、どっちがかつこええ？山崎育三郎には勝てんな。あいつは歌が上手いから」と真面目にいうようになったんです。再婚当初では考えられない驚きの変化です。本音話すのが嫌いで、寄ってきたと思ったら噛みつくような野良猫のような夫だったのに。この体験を通じて私は「言葉が人を癒す」ことを確

信しました。その気づきが、後の占い師としての根っこになっていきます

## 占いは、視点を俯瞰する技術

自分の占いは、未来を当てるためだけのものではありません。占いとは道具であり、クライアントが自分の幸せを見つけ、その道を歩き出すための伴走者でいること、自分の力で幸せを見つけるために、視点を少し変えるお手伝いとも言えます。

鑑定では、まず相手を肯定することから始めます。悩みの内容が常識から逸脱するようなものであっても決して否定しないルールを決めています。クライアントが感じている悩みへの思いが、その人の世界のすべてだからです。まず私は相手の思いを受け止める。するとクライアントが安心して心を開ける土台が生まれます。誰かに否定されないという経験が、悩み解決への最初の一步になります。信頼関係ができたとで、カードの結果を出しつつメッセージを伝える。ただ結果を押し付けるのではなく、今の悩みの視点を変えてみようと言いかけます。迷路の中にいるときは出口が見えない。

でももし迷路を上から見ることが出来れば道筋が見えてくるでしょう？それと同じことを相談内容とカードの結果を照らし合わせながらお伝えします。

## 何があっても、大丈夫

私が最後にお伝えしたいことは、「何があっても大丈夫」ということです。現実には幸せにすることしか起こってない。この思い込む力は冒頭で紹介した「どうせ愛されているし」という自己肯定する人生を信じる力と一緒です。不妊治療で感じた絶望、義両親からの言葉や離婚の痛み、再婚後の葛藤、それらすべてが私のいまの幸せに繋がっています。もし過去に戻って自分に声をかけるとしたら「何があっても大丈夫」と伝えたいです。占いでも同じようにお伝えしています。これは単なる励ましではなく、私の人生の得た確信です。

取材・構成＝笹尾優子  
写真提供＝占い師 まさこ